

---

# 異能力の夢幻者（仮）

葵 秋一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異能力の夢幻者（仮）

### 【Nコード】

N9614Y

### 【作者名】

葵 秋一

### 【あらすじ】

異能や魔術という、変わった力を有する人材を集めた組織による主人公達の物語。元々がそのような世界観を持っています。

## 第零話 プロローグ（前書き）

自分の中の主人公最強ってこういうものかなあとという妄想の元生まれた作品です。

本編はまだプロットの段階なので、プロローグを先にあげておきます。

本編が書き終わり次第、随時アップの予定です。

## 第零話 プロローグ

この場所はとても静かな空間だ。

静寂を包み込む夜の都市に点在する高層ビル群は、巨大な壁とも言えるくらいに聳え立っている。人間が何百人束になってもかなわないその中の一つ、この街で一番高いとされている新設のビルの最上階には一人の人物がいた。

「……」

最上階は屋上となっており、至るところで光り輝く夜景と共に、軽く吹きぬける夜風が一人佇んでいる少女の髪をゆっくりと撫でていく。

ふわりと髪を揺らす少女の銀髪は、薄暗い闇などに留めることなくある種の神々しさを放たばかりの美しさだ。だが、うなじの辺りをくすぐる髪の感触を全く気にすることなく、少女はとある一点を無言と無表情で見つめていた。

ただ一点を見つめているだけなら、夜の世界に浸る一人の少女として周囲からは認識されるだろう。しかしながら、この状況を見ればそうはいかない。なぜなら、彼女が持つそれが夜景の鑑賞という夢心地から一瞬にして、現実を引き戻されるからだ。

両手で構えているのは、いくつもの部品が組み合わさって構成されている狙撃銃。

左手で銃をブレさせないように持ち、右手人差し指はいつでも撃てるとばかりに引き金に添えられていた。

少女はその場から微動だにしない。  
石造のように眉一つ動かさないのは、相当訓練された兵隊の如き証とも捉えられる。

『メリア、聞こえるか？』

沈黙を維持しつつ、スコープ越しに一点を覗いていた時だった。耳にはめていた小型の無線から低い声が聞こえてくる。

「はい、聞き取れます」

短く答えると、声の主は一瞬気を抜いたように笑った気がした。

『標的の方はどうだ？ 何か変わった動きとかは』

「先ほどから監視を続けていますが、動きに変化は見られません。おそらくこのまま突入しても問題ないかと」

メリアと呼ばれる少女は、スコープ越しに見える姿を端的に説明していく。

これから襲撃を行う相手は、人数にして十を超えるものだ。それも通常の人間ではなく魔術師という存在だから厄介なこと極まりない。

『そうか。ならメリアの狙撃を確認した後、俺達は一気に突入する。……それとメリアのことだから心配ないだろうけど一応聞いておくよ、大丈夫か？』

大丈夫とは、おそらく遠距離による狙撃のことだろう。狙撃とい

うものは遠距離になればなるほど、困難を強いられるものだ。そして今回の狙撃は、目的から数キロと離れている場所から行うことになっている。もちろん、その気になればもっと近くへと詰め寄っての狙撃は可能だった。だが、メリアがそうしなかったのには単純な理由があったのだ。

「心配は要りません。私の力を忘れたのですか？」

「……そうだな。あの眼と力があれば死角はないってか」

声を忍ばせて笑っているのは、どこかの物陰にかくれて奇襲の態勢に張っているからだろう。おそらく他のメンバーも同様、陰に隠れて機会を伺っているはずだ。

「わかりました。それでは、任務を遂行させていただきます」

そういって、無線越しの会話を終わらせ、再び意識をスコープの先へと移動させていく。

すると、先ほどまでその場にはいなかった魔術師が数人姿を現していた。

メリアの右手に少しだけ力が加わっていく。

いつものように、体内に眠る魔力を細腕へと伝わらせ、狙撃銃に装填されている弾丸の通り道に魔力を巡らせていく。次いで、誰にも悟られないことにはない小さな深呼吸を一つ。魔術による狙撃は邪道だといわれた過去をふと思い出したが、そのようなものは妄言。

魔術とはあくまで過程であり、結果として狙撃を行うだけだ。

「では、参ります」

雑念を振り払い、小さくビルの屋上に少女の声が響き渡った瞬間。

少女の人差し指が引き金へと触れ、うねりを上げて弾丸が標的へと飛んでいった。

第一話 魔術師と魔術機関 (1) (前書き)

まったりと更新していきます。



## 第一話 魔術師と魔術機関 (1)

夜が明けて、しばらくした時間帯である午前七時過ぎ。

森夜<sup>もりや</sup> 大地<sup>だいち</sup>は、とある一室で一人の女性と話していた。

「以上が、昨日遂行した依頼に関する報告です」

特に緊張することなく淡々と結果を報告できているのは、この部屋に来るのがもう数えるくらいではなくなったからなのだろう。

こじんまりとした部屋の割には、あらゆる資料がきちんと整理整頓されているあたり、流石機関内部で一、二を争うくらいの綺麗好きで噂されている人だ。そんな人物、白凧<sup>しつなぎ</sup> 秋菜<sup>あきな</sup>は大地が作成した報告書に軽く目を通すと、満足げに顔を上げた。

「後処理は最小限で済む……か。相変わらずの働きぶりだね」

眼鏡に手を触れて大地を一瞥すると、報告書はそのまま机の引き出しにしまわれた。こうして依頼を完遂したという書類があの中に何百枚と納められていつているのだ。

そして、秋菜は何かこちらを見据えているような、そんな不敵な笑みを大地へと向けてきた。

不敵な笑みというものが似合う人物はと言われれば、迷いなく秋菜という名前を述べてしまいたいくらいに似合っている顔である。

白凧秋菜は一言で言うと、偉い人だ。

今、大地がいる場所は魔術機関という場所であり、魔術師という世の表舞台には決して立つことはないであろう集団を束ねる機能を持つ建物である。

魔術師という生き物は、基本的に独力で生きていくことが多い。なぜなら、自身が習得や開発を行った魔術を盗まれる恐れがあるためである。しかしながら、天寿を全うするまでに完全なる独力で生きていけないのもまた魔術師という変わった存在なのであったりする。

一見して矛盾しか見えない言葉の意味なのだが、魔術師は思った以上に自身が行った行動を簡単に割り出される手段を持っている。

もちろん、普通に魔術師としての生活を送っていれば何の問題も生じることはない。だが、魔術師連中の中でも奇異な存在というものはいくらでもいる。

そのような存在が、世のバランスを崩壊しかねない行いを本気で行う場合があるのだ。そんな異端がある意味で監視する役割をもつのが、この機関というわけである。

もちろん、行動を監視されると聞いて、機関に所属することはほばないであろう。だ、けれどもだ。うまく所属させる手段を持っているのもまた、機関という巨大な組織なのだ。

秋菜は、この機関を任されている機関長という立場の人間だった。要するに学校の理事長と同値だ。

「しかし、君が作ったグループには驚かされる。優秀な人材だけでなくきちんと統制を取れているからな。だから、今日だってリ

ダーである君が機関長である私の元に一人で報告しにきたのだろうか？」

口元を吊り上げる時の秋菜は、不思議な表情をしている。ミスティアスな雰囲気をごかしこに醸し出すと同時に、本当に柔らかい笑みを見えない程度に薄く切つて隠しているという感じた。

「残念ながらあいつらは、俺を置き去りにしてどこかに行きましたよ。それに俺はリーダーなんかじゃありません」

「謙遜のつもりか？ だとしたら大きく間違っているぞ」

今年で二十の半ばに入ろうとしているであろう機関長は、まだまだ美しさを保っていた。整った顔立ちに中途半端な長さに伸ばしている髪をポニーテールで一本に縛っている。さらに、華奢な体つきを浮き彫りにさせる服装だから、実年齢よりは若く捉えられる場合も多いらしい。

「別に謙遜なんかじゃありませんよ。本当のことを言っただけです」

「それを謙遜というんだ。まったく、素直じゃないな」

一人で自己完結をしている機関長を、横目で見てやる。

こういふところは、本当にあの人そっくりだ。見た目や根本となる性格は大いに違うというのに流石は双子の姉妹といえる。

「まあいい、ところで今回の相手はどの程度の手だれだった？」

今度は片眉を吊り上げて、大地へと続ける。

「良くも悪くも三流の魔術師ですね。どうせどこかに入れ知恵されたゴロツキってところでしょか」

「ハハ、言ってくれる。君もまだ十八になろうとしたひよっこだというのに」

からかわれたからと言って、ムキになるほど大地は子供ではない。確かに秋菜が言うように、大地は今年で十八になる魔術師だ。年齢で言えばまだ子供だなと言われても文句はない年頃でもあるが、魔術師としての人生はそれなりに踏んでいるつもりである。そのよ  
うなことは、ここにいる人物自身がよくわかっているはずだ。

「そんなひよっこでも魔術師がなんたるかは心得ているつもりですよ」

「当然だ。仮にもあの馬鹿の弟子を務めていたのだからな」

これには思わず吹き出してしまう。姉妹でこれほど性格が違うというの莫名其妙に面白い。同じ人間としての遺伝子を組み込まれ、かつ同じ魔術師の家系としての術を習得したというのに。さらに、姉妹としての相性はそれほどよくないようだ。姉の顔を思い出しているらしい秋菜は、とても嫌そうな顔をしていた。

「……過去に何かあったんですか？」

「何もないよ。私はあいつが苦手なだけだ」

これ以上は言及されたくない、顔を軽く背ける秋菜。このような仕草は変に子供っぽい一面があるため、機関長という立場を一瞬忘れてしまいそうだった。

「そんなことよりもな、君はそろそろここを出て行く気はないか？」

それは突然の提案だった。

「出て行くって、魔術機関からってことですか？」

「そうだ」

「まさか、左遷……ってそんなことはないか。一体どういう風の吹き回しなんです？」

魔術師に左遷という言葉はない。魔術師というものは職種ではなくあくまで自身がそう名乗ることによって確立しているだけだ。そのような変わり者の集まりである魔術機関。基本的に術者が機関に所属することによって、魔術師としての行動範囲を広げることが出来る場所を出て行けとは一体どういう見なのか。

「そこまで驚くことはないだろう。私はもう君は一人でもやっていけるんじゃないかと思ってね」

このような時の秋菜はとても真剣な顔をする。両腕を顔の前に組んで、座ったまま上目遣いで眺めてくる姿に対し、大地は言葉を加えていく。

「魔術師と関わりを持つために、最大限の提供を行う。そんな機関を出て行く意味が分かりません」

「何、機関とはあくまで魔術師という個人を守るためのものだ。魔術師になって右も左も知らないような奴らのための措置がここなんだよ」

この世界に生きるということは、すなわち表の世界には通じないということが簡単に通じてしまう。そのようなことを野放しにしていると、術師達は世の法則を無視して好き勝手に赴く恐れが生じて

しまうのだ。

そのようなことを表面上で封じる役割を持つのが、正式な機関の役割の一つというわけである。

「つまり、君はすでに一人でも問題はないと私が認めただ。名誉なことだぞ」

「はあ」

余りにも唐突な展開だったため、返事もそっけなくなってしまう。要するに秋菜の言うことをまとめれば、大地はそれなりの魔術師としてやっていけると判子を押されたということか。

「と、いうと俺が出て行った先に待っているのは、一人で拠点を構えるか、またはフリーで依頼を受けていくという二択ということですね」

「あるいは、どこかの誰かみたいに世界を回るというのもアリだな」

下らない、とはき捨てるのは聞かなかったことにする。また話を戻すのも面倒だ。

「残念ながら旅は全く興味ありませんね。そんなのは小説の中の主人公がする話です」

「外界の刺激を受け入れるために旅をするのも、また風情があるがね」

「冗談を。俺は冷めた人間ですからね。外界よりも世の断りのほうが断然興味がありますよ」

自嘲気味に笑うと、秋菜は表情を変えていた。おそらく冷めたという言葉に反応したことは顔を見ればだいたいわかる。

「そうやって、自らを冷めた人間だと罵る奴に限って、中身は温かいモノを持っているんだよ」

「そうかもしれませんがね。流石に無感情とまではいかないですけど」

このようなやり取りは、過去に幾度となく行っている。自らを冷めていると思っている大地にとつてはいささか不思議に思われる秋菜の言葉。流石に全てを冷徹に行える度胸こそはないので今度からは冷めた、ではなく冷静なと言い換えたらどうだろうかと一人胸中でつぶやいていると

「まあ、私としては君が出て行くのが出ていかまいが、代えの駒はいるから問題はそこそこないのだが」

まるで、試すような口調。

次いで、それは嘘だと少なからず感じていた。

いくら魔術師の顔で言われようと、秋菜の微細な表情を読み取るにはさほど苦労しなかったのは、単純にあの人物と似ていたからだ。

自分のことを優秀だと誇張する気は毛頭ないが、それでも頼られているという思いを見せられているというのは素直に嬉しかった。

「俺はここを出て行く気はありませんよ。機関にいろいと助かる部分がありますしね。それにここに入りたての頃は、いつか一人で拠点を構えると意気込んでいましたが、今はここにいたほうが居心地がいいです。……恩義もありますし」

「ふうん。いい仲間を持ったな」

心中はお見通しというわけか。大地は特に取り繕うこともなく笑顔を向けた。

「せいぜい最大限に機関を利用させてもらいますよ」

「クク、言ってくれ。まあ、私も君みたいな稀有な能力者を手放したくはなかったからね。こちらこそせいぜい頑張ってくれたまえ」

フツ、と薄く笑った秋菜はどこか楽しそうだった。年が離れた大地を可愛がっているのだろうか。それとも魔術師の顔で見えて、大地を使えると踏みとどまらせるために試したのだろうか。

真意こそは分からなかったが、確実に分かることがある。

やはり白凧秋菜機関長は、どこかあの人物に似ているということに改めて身にしみたのであった。

.....

機関長の部屋から出た大地は、朝の日差しを窓の外から受けながら一人廊下を歩いていた。

「ふう」

引き受けた任務も終えたことから、ついつい大きく息を外へと吐いてしまう。やはり、運び終えた荷物を降ろす瞬間というものは心地が良いもので、任務を終えた瞬間が肩に纏わりついた重い空気が消えて清らしい。



ちなみに午前七時を過ぎた頃の機関内部は、人がほとんど存在しない。

大地が闊歩したところで誰も向こうからやってこないのは、時間的な問題だからだろう。

本来ならば、昨日のうちに報告すべきだった任務内容なのだが、機関との兼ね合いのために報告が遅れてしまったのである。なので、このような朝一番という時間に報告することは大地にとっては珍しいことだった。

それにしても、秋菜の提案には驚いてしまった。

ここを出て行ったらどうだ……という不意打ちの言葉の真意がまいちよく分かっていなかったのだ。

……いや、本気であったらわざわざ提案という形の言い方をしないはずだ。

言う時ははっきりと言う、というのが秋菜という人物の性格だから、おおよそ、師匠と同じ道を歩む気があるのかという決意を大地が持っているのかを遠まわしに聞いたのだろうか。

だとしたら、不器用な人だと大地は胸中で笑った。

魔術機関青葉 青葉町に設立されているからそう呼ばれている

へと大地が所属してからちょうど一年が経過した。おおよそ通常の魔術師ならば、席だけを機関へと置いてどこか遠くへと赴く場合がほとんどだ。

それは、万が一なにかあったとしても機関の名前を使うことで、ある種の武器へと変貌させることが出来る。というのは建前で、機

関内内部にある資料や魔術の道具を無料で利用できるから、こぞって所属を求めていくのだ。

いくら優秀な魔術師でも、金銭面の都合という現実問題には勝つことが出来ない。

中には錬金術師もいるのだが、錬金という行為はあくまで物質の練成というカテゴリに位置する術なのであって、金を生み出す万能な能力ではない。

すなわち、錬金術師だとしても手足を使って働かなければならないということだ。

「錬金術か……」

小さく呟き、大地は苦笑する。

あの人は一体今、どこで何をやっているのだろうか。

魔術師としてどこから一步を踏み出せばいいのかが分からなかった時、手を差し伸べ、弟子として招き入れ、そしてこの機関への所属をさせた大地の師匠。

白凧しなな 錬香れんか。そう、先ほど任務の報告をした相手、白凧秋菜の双子の姉が大地の魔術師としての師匠なのだ。

そもそも、この機関へと所属することの原因となったのが、師匠、錬香による妹とのコネであった。もう、師匠として教えることはなくなつたと、ある日いきなり言い出しここへと連れてきた。もちろん、あの時の秋菜の顔といえは、冷静な表情が売りの彼女が恐ろしいものを見たかのような表情で目を見開いていたのだから、滑稽である。

二人は、錬金術を自らの得意分野としており、特に単純な錬金ならば、姉のほうが上をいくそうだが、緻密で精密な作業のほうは妹の側に軍配があがると師匠には聞いている。

まるで、二人の性格をそのまま体現しているような術の成りだ。魔術師は、同じ術式でも自身の魔力と性格による誤差が生じやすいという言葉は本当だと、当時理解したのを思い出していた。

しかし、錬金術師である錬香がどうして自分のことを、ためらいもなく魔術師と呼んだことには驚いていたことも同時に思い出す。

この世界において、魔術とは、通常起こりえない現象を表すことを総称して呼ばれるらしい。つまり、錬金も通常ならば起こりえない現象であるから、魔術という一まとめに属する術だと師匠は言っていた。

杖を振り、魔方陣を描いて神秘を引き起こすのが魔術師だとばかり思っていた、幼い頃の事実がこの時点で歪曲してしまっている。だからといって、魔術師というものに抱く気持ちは変わっていないのだが。

そんなわけで、こうして師匠に魔術とは何たるかを一から叩き込まれて、このような姿へと育っていったのが今というわけだ。

ひとしきり、心にしまっておいた過去にほんの少しの時間浸り終えると、大地は大きく背伸びした。

機関という響きから、殺風景な建物の構造をしていると思いがちだが、案外内装は明るく装飾されている。廊下は薄い赤の色をした絨毯に、上を見ればシャンデリアを模したつくりをしている灯りがあつた。

これは、魔術というものが西洋生まれであることから、造りをそのまま輸入した所以だと思っっている。それか、錬金という東洋ではあまり馴染みのないものに囲まれて生まれた白屈の家系がこのような造りだったからこそ、必然とこのようなものになっているのかもしれない。

そんなことを思いながら、大地はただ廊下を静かに歩いていくのだった。

第一話 魔術師と魔術機関 (1) (後書き)

もし、文章が見にくかったら感想欄にでも書いてくれると嬉しいですよ。

## 第一話 魔術師と魔術機関 (2)

朝起きてまだ朝食を摂っていないため、大地は機関内部にある食堂へと足を運んでいた。

食堂と言っても、学園生活で描かれるような雰囲気ではなく、何人かで掛ける椅子に塵一つ見当たらないくらいに手入れされているテーブルがいくつも等間隔で並んでいる。簡潔に述べるならば、貴族が嗜むような空間が機関内部にある食堂と呼ばれる場所であった。

魔術師という以前に、人としての品格を試されそうな場所であるここは、どこか西洋じみたものを意識した造りになっている。やはり何らかの意識がされてないと、このようなものを青葉町という割と都市化した町に建てる事はないだろう。

とりあえず、大地は何らかの食にありつくべく、どこか適当なテーブルに腰をかけようと目配せしていた時だった。

「あら、帰ってきましたわね」

どこかで聞いたことのあるような声が、大地の前方から発せられたのをきっちりと耳で聞き取った。

次いで、声の主の方向へと歩いていくと、一番奥のテーブルに腰掛けていた少女がにっこりと微笑んで優雅に左手をゆらゆらと振りつつ、こちらに合図らしきものを送ってくる。

「……レイシア、用事があるんじゃないのか」

もしこれが何も知らない女の子であつたら、運命の出会いと言わ

れてもその場で信じることだろう。しかしながら、生憎この女の子は運命によって導かれた人ではない。

要するに、知り合いだというわけだ。

「用事………ですか？」

大地がテーブルへと寄りかかるのと同時に、件の少女、レイシア・ブレイムはきよとんと首をかしげる仕草で迎えてくれる。仕草の面で言えば、完璧だったが大地は騙されない。

「わざとらしく首を傾げるな。たしか言ったよな。私達は用事があるので大地さんだけで報告に行って下さいなと」

「そうですね」

「その用事というやつは一体どうしたのかな？」

報告をほったらかしにしてまで、大事な用事なのであったらもちろん許せる。大地だって心は広いほうだ。だが、レイシアはかしげた首を元に戻し、ゆったりとした動作で深呼吸を一つすると、大地へと向き直って言った。

「ええ、朝食という優雅な時間を定時刻に行う用事ですの」

フフ、と妖艶な笑みでそんなことを言われれば、くらくたとくるどころかむしろ呆れ返ってしまった大地だった。

「そのどこが大事な用事なんだよ」

「な、何をおっしゃるのかしら。朝食を抜くことがどれだけ体に影響が及ぶのか分かりませんが、大地さんは」

「わからん。俺は師匠に弟子入りしていた時は一日に一食しか食べない時だってあったくらいだからな」

師匠とともに、あちこちを転々としていた時のことだった。実は、その時に錬金術を扱つくせに金に給するという事実を知った事件でもあった。あれ依頼、金は汗水流して手に入れるものだと心に刻み込んだのである。

「それはそれは、すごいですわね。よく今まで生きてこれましたわ」

「……逆にお前は一体どんな人生を送ってきたのかを聞きたいな」

レイシアは大地の言葉を耳に入れながら、テーブルに展開されていた朝食を優雅に口に運ぶ。どうやら今日の朝食はパンに、サラダ、スクランブルエッグにベーコン、飲み物にコーヒーのようだ。

厚みがあるベーコンを、ナイフとフォークでそれこそ音を立てることなく、スンとナイフで切り分ける。切れ味がいいのかそれとも切り方に慣れているのか。

目を閉じて、食べ物をしつかりと味わい、食器を皿の上へ音を立てることなく置いた後は紅茶を口元へと持っていく。見るからに高級感漂うカップをみずみずしい唇へとつけて、ほんの少し飲んだ。

そうして、元の位置へと戻すこと数十秒後。

「見ての通りですの」

「もはや、どこからツツコンでいいのか分からないな」



この貴族感を放つかのような動作を見せてくれるレイシアは、真正銘の貴族なのだ。いや、もっとかいつまんで言えば高貴な出の魔術師だった。

レイシア・ブレイムという名から分かるように、彼女は外国出身の西洋魔術師であり、魔術師としては名家の出であるらしい。

魔術師というものは、半分以上が家系によって能力の大小が決定付けられるのがほとんどだ。それは、先代による長きにわたる研究の成果をまとめた術を子孫へと継承するからである。

魔術の研究とは、常に枝分かれした無限大の分岐によって生じる。その中から、自己に合った魔術を発掘していくことが、当面の魔術師の課題となる。さらに、見つけた後にも作業は膨大にあり、その術を磨いていかなければならない。

いくら原石を見つけたとしても、あちこちに棘が生じていれば美しい形をした宝石とならないのと同じ。魔術もまた、そのような粗を削って初めて立派な自己の魔術となっていくものなのだ。

そして、粗を削る作業というものは非常に年月がかかる。当然のことだが、魔術は物体ではないために、工具があれば簡単に石を削れるということとは訳が違う。長い修練と努力、加えて自身の才覚によって研ぎ澄まされて洗練されていく。

何が言いたいのかというと、古くから魔術というものに関わっている家系は、鉱石を削る作業を何代にもわたって行っているということだ。

先代が術を磨き、寿命が来たら子孫へと磨きかけの術を全て委ねる。委ねられた子孫はまた達成しえなかつた術をさらに磨きをかけていき、再び寿命が来れば、その子孫へと。

こうして、何度も繰り返されていつて魔術というものが完成に近づいていくのである。

今、対面に座っているレイシア・ブレイムは、いくらも代を継いだ生粋の魔術師であったりする。

現、ブレイム家の当主レイシア。

然るべき筋からの情報では、祖国では相当の権力と実力を持つ魔術師の末裔と謳われているそうだ。そのような血筋を持つ魔術師ならば、わざわざ小国の小さな機関に所属する意味がない。なぜなら、権力を持つ魔術師ならば名前を名乗るだけで相当の抑止力を持つ上に、家そのものが魔術師の拠点となっているためだ。

なせ、このような貴族がここにいるのかはおいおい話すことになるだろう。

「まったく、騒がしいですわね大地さん。朝食の時くらい静かにしなさいな」

「はいはい。悠然な態度で接す、がブレイム家の家訓の一つだけか」

「そうですねよ。それが魔術師の上辺に立つ人間の責務ですの」

お嬢様気分で笑うことに腹が立たないのは、実際にお嬢様だからだ。

ブレイムという姓は、高貴な魔術師であるのと同時に高貴な貴族

である。

表向きの顔はブレイム家の令嬢、裏の顔は魔術師としての名家、ブレイム家として名をはせているとのこと。見る限り、気品があることくらいは分かるので、出会った当時はあまり驚くこともなかったのだが。

「ふう、今日の紅茶はおいしいですね」

こうして頼杖ついて様子を眺めていると、とても一端の魔術師とは到底思えない。

貴族という生活を反映するかのように豊かな姿をしているレイシアは、街中を歩けば誰もが振り返るであろう美しさを持っていて、可愛いという言葉よりも綺麗という方がしっくりくる。

大地の目線程度の背丈に、引き締まった体つき。であるが、女性としての柔らかさを兼ね備えているのは、幼い頃からいい物を食べているからだろう。

真っ直ぐに伸びた髪は、日ごろから手入れされていて動くたびにさらさらとレイシアの後を追う。そんな彼女の全体を強調するかのように、身に纏っている服が実に豪勢だった。

黒を基調とするドレス調の服は、まさに上質な糸や布が使われているのが素人でも理解できるくらいに造りが上等だ。一着はいくらと聞かれたら、平気な顔をして目を飛び出さん値が算出されるだろう。また、服のあちこちにフリルがこれ見よがしについていて裾の短いスカートからは艶かしい太ももがあらわになっていた。そのままだと色香を巻いているようにも見えるが、黒のニーソックスがそれをよりよい具合に中和しているのである。

「あら、どうしましたの？」

相変わらず自分のペースで朝食を召し上がる姫君が、両目に備えている碧眼をこちらに向けて尋ねてくる。

自然と、彼女の胸元に目が行った。

大地と同じ十八だというのに、大人びた口調からいくつか年上に見えるがちである。そんな彼女の服は胸元がゆったりとした作りになっていて、年頃の女性にしては少々大きく育ったとみえる女性の象徴を浮き彫りにさせる。かといって、不自然なくらいに大きくはない。逆に大きすぎると魔術師同士の戦闘に発展した際に、重い枷となってしまうがちであろう。

そのところは男である大地には分からないことだ。

「フフン、大地さんもオトコノコですわね」

ようやく食べ終えたレイシアは大地の視線の先が分かったようだ。ナプキンで口をふき取ると、少々照れくさそうに自らの胸元を隠す、ふりをした。

「なっ」

本日二度目の不意打ちに大地はただ、目を逸らすことしかできなかった。

.....

「ところで、さっきからページも新聞をめくっていないその奴」

レイシアにからかわれそうだったので、慌てて話題を変えようと頭をめぐらせていると、ちょうどその奴がいた。元よりその存在は確認していたのだが、まったく会話に入ってこないためにそのままレイシアとの二人会話となっていた。

「……ん、ああ、大地。珍しいねこの時間帯にここにいるなんて」「この期に及んでしらばっくれるつもりかよ」

新聞紙を広げて、顔を隠してはいるものの声でバレバレだ。

「お前も、俺に報告を押し付けて朝方からレイシアとデートとはな。いいご身分だ」

デートという言葉に、ビクリとレイシアが反応したが、今はどうでもよかった。

「違うよ。僕だって用事があつたんだ。今日の朝刊を定時刻に読むという用事が……」

「へえ、読みもしない英字新聞をねえ」

レイシアの隣で新聞を広げている人物は、英字の新聞を読んでいた。だが、さっきの会話の途中から一枚もページをめくる音が聞こえていない。ただ読んでいるフリをしているだけだったのだ。

「顔を隠してるつもりだろうが、レイシアの隣にいる時点で誰かわかるっての」

すると、その人物は広げていた新聞をテーブルの上にたたんで、置いた。

倉本 友也。

二人と同一年の魔術師で、当然この機関所属の者だ。

貴族然としているレイシアと並ぶと、かなり見劣りするような普通の服装なのは仕方がないことだろう。友也は大地と同じ平民出身の魔術師であり、それほど歴史を積んではない云わば同志のようなものだった。

男にしては細身の体格で、肉体派が剛腕を放てば軽々と消し飛びそうなくらい。だが、柔らかな顔立ちとそのスマートな体軀を合わせれば、たちまち好青年となってしまうから不思議だ。

大地よりも少しだけ高い背丈に茶色の短髪。

それが、大地に楽しそうな笑みを浮かべて言葉を返してきた。

「まったく。そんな推理が出来るなら探偵にでもなればいいのに」

「誰が探偵になるか。俺は魔術師だからな」

きっぱりと言ってやると、隠れていた顔を露にした男が大げさに天を仰いだ。

「いやいや、案外魔術師出身の探偵って探せば結構出てくるものだよ。科学技術じゃ判明できないようなこととか、魔術的な作用が働いて起こった事件とかを解決に導くために、敢えて魔術を学ばずという探偵も最近はいるみたいだね」

世界の裏側を覗く行為に等しい魔術師ならではのパフォーマンスだろう。たしか、現代で活躍する弁護士の一人も魔術師出身だとい

うつことをどこかで聞いたことがあった。

「だからといって探偵なんかになる気はないね」

「まあ、大地さんの場合ですと、尋問の場合に相手を操ることに  
なりますしね。向いていないといえれば向いていないですわ」

失礼な物言いだ。しかし、そんな弁護士がいれば自身が判決を決  
める神となってしまうのではないか。そんなことは道理に反すると、  
正義を貫く連中にこそって言われそうだ。

「それに、探偵といえれば華麗に、そして堂々と推理をする者です  
の。大地さんは……ねえ」

男に同意を乞う目を向けると、何のためらいもなく首を縦に振っ  
ていた。

「……いい加減、怒ってもいいか？」

「まあまあ、そんなこといわずに紅茶でも飲んで気分を落ち着け  
なさいな。カップならここにありますので」

そう言っつて、まだ何も手を付けられていない新しいカップをレイ  
シアは差し出してきた。

もしかすると大地がここに来ることを見越していたから、こうし  
て準備できたのではないか。

そんなことを思うと、ため息をつきたい気分になった。

「華麗に推理ねえ。レイシアは西洋出身だから探偵にそのような  
古風なイメージがあるんだろうね」

「ええ、私の好きな探偵はシャーロックホームズですの」

いかにも、な解答だった。

有名すぎるくらい有名な探偵で、架空の話だが実際に存在するのではと思われるほど影響力がある人物だ。それに、西洋の出身というレイシアを見ると、なぜか必然とそのような探偵像が見えてくるのだった。

「冷静沈着で、持ち前の洞察力と行動力でどんな難事件もたちまち解決する姿は読んでいて一瞬で虜になりましたわ」

両手を頬に当てて感慨に耽ったレイシアを見て、二人は顔を合わせて苦笑する。

魔術師が探偵に憧れるという構図が面白かったのだ。

「で、話を戻すけど、お前らは報告を俺に任せてサボったってことでもいいな？」

「わかったよ。僕はサボりましたよ。だって、面倒だったからね」

「私は朝食という用事があったからサボってなんかいませんの」

「はいはい、分かりましたよ」

いまさら怒ったところで報告は終わったのだから、何の意味もないならば、無駄に労力を消費するほど大地は余計なことはいらない。

レイシアに注いでもらった紅茶を口につけると、友也が唐突に口を開けた。

「大地、報告のほうはどうだった？ 一応聞いておかないとね」

昨日行われた任務には、大地の他に、友也、レイシアも参加している。任務といっても、一人で行うのではなく複数で行う方が効率



が良かったので、最近はその方法をとっている。

ここに入りたての頃は一人で全てをこなしていたが、物事には限界というものがあつたことを知らされたのも、その期間中のことでもあつた。

「……あれ、そういえばメリアはどこに行つたんだ？」

あともう一人、任務に同行していたのだがここにはいない。となると、考えられることといえば……

「メリアさんなら朝方から別の依頼へと駆り出されましたわ」

「そうだったのか」

あいつも中々機関にとつては重宝されている存在だからな、と思つたところで大地は嘲笑気味に二人へと笑みを作つた。

「どうやら、どこかの誰かさん達とは違つて立派な用事があるんだな」

「おいおい、誰のことを言つてるんだい？」

「いやですの。大地さんはメリアさんに鼻屑するつもりですの？」

返つて逆効果だつたみたいだ。というよりは、二対一で口げんかをすればかなわないことを今更になつて悟つてしまった。

「何でもありませんよ」

いい加減二人にからかわれるのも嫌だつたので、さっさと報告の結果を話すことにした。

「要点だけをまとめれば、後処理はいつもの通り向こうで済ます

そつだ。といつても、今回の依頼は悲惨な結果にはなつてなかつたからな。あくまで犯罪者の逮捕という意味でも後処理だ」

今回の依頼内容は、魔術を悪用する三流術者による集団が根城にしていたビルを一掃しろとのものだった。内容自体は単純であり、また相手も大した手だれではなかつたのですんなりと終えた。

二人もそれが分かっているから、軽く聞き流す程度の態度で聞いていた。

「ああ、それとここを出て行って独り立ちしたらどうだって言われたっけ」

途端、二人の顔色が一気に変化した。

「まさか。あの女がそんなことをおっしゃったんですの？」

「ああ、機関長が言った。でも、本人はまんざらでもなくただ単にからかっていただけだと思つがな」

しかし、二人の顔は先ほどとは大きく変わっていた。

まるで投げ代にしている大切なものを手放す瞬間のような顔だ。自分で投げ代と他終えたことは恥ずかしいが。

「で、大地はなんて返事したんだい？」

「もちろんノーだ。俺はここを出て行く気はないよ」

良かったと、二人は安堵の息を漏らす。

その姿が微笑ましくて、ついつい顔に現れていたようだ。

「まったく。もし出て行くとおっしゃっていたら頬を思い切り引

っぱたいていましたわ」

「同じく。僕だったらちよつとした制裁でも加えようかと思ったよ」

さらつと、危害を加える発言をしたことには不機嫌になりかねなかったが、それだけ二人は大地を頼っており、また、信用していたのだ。

それが好意の裏づけであることを、少なくとも大地は信じている。

「だって、そうでしょう。もし私達を放つてここを去つたらそれこそ自分勝手すぎますの」

若干、拗ねた表情を見せて無邪気に思ったことを口に出すレイシア。

友也は口には出さなかったものの、レイシアと同じ思いを持っているのだろう。

「安心してくれていいよ。俺はここを出て行くつもりはない」

もう一度、それだけをはっきりと言つと、大地は苦笑してもう一度紅茶を口に含ませたのだった。

## 第一話 魔術師と魔術機関 (3)

いきなりだが、魔術機関は学校といわれる組織ではない。

魔術を扱う機関であるから、ひよっとすると学校という学びやの機能を備えていると思われがちなのだが、実際はそれほど確立化はされていない。

それほど、というのは学ぶ機関は一応に存在したりするのである。通常、魔術師は誰かの弟子となって修練に励むのが通例とされている。理由は、マンツーマンだと魔術の上達が複数相手に教えるよりも早いからだ。

師匠と弟子は大抵一対一の関係に成り立つもので、複数の弟子を持つ魔術師もいることにはいるらしいが、その末路といえば自らの師を狙つての醜い争いとなることが多数を占める。

それを防ぐためにも、弟子は基本的に一人のみなのだ。そして、弟子となる方法なのだが主に二通りの方法に分かれる。

一つ目は、生まれ育った環境そのもの、つまり自分の親に弟子入りするというもの。もう一つは、血のつながりのない赤の他人とされる魔術師に弟子となるよう懇願すること。

前者は魔術師の家系ならば、ほぼ全員が共通して行っているものだ。肉親である両親を師とすることにより、始めからきちない空気を纏うことなく簡単に魔術の修練に明け暮れることが出来る。それに、血のつながりというものは魔術師にとっては重要なもので、

自然と同系統の魔術を扱うことに長けている体となっているのだ。もちろん、自分の子供だから、同じ魔術を行使するパスの構造が似て生まれることから来ている。

加えて、先代によって培われた魔術の研究過程を全て子孫へと移していくため、教わっていく魔術の道筋が出来た状態で挑むわけだ。以上のことから、親に魔術師の弟子として教わることは大きなアドバンテージにもなる。

そんな華やかな道を辿るものとは正反対に後者の場合は、少し勝手が変わっていく。

前者の時と違い、血がつながらない魔術師の弟子となるのはなかなかないものである。なぜなら、魔術師は偏屈が多いからだ。

魔術師の生きる道の一つが、開発した魔術の継承だ。通常ならば、継承相手に選ぶべき存在は自分の跡継ぎとなる血のつながった子孫となる。当然、自分の血を分かち合っている存在であるから、堂々と委ねることが出来る。

だが、もし継承する魔術の対象がどこからかやってきた見ず知らずの魔術師の卵であればどうだろうか。きつと寄り付くもの全ての存在を無視して教えないことだろう。

そんなわけで、第三者の魔術師の弟子を取るという物好きはなかない。

……しかし、世の中には本当に変わった魔術師がいるものだ。

それもそのはず。大地が教わった魔術の全ては、赤の他人であった白凧錬香によるものなのだから。

「へえ、機関内部の魔術教育ってこうなってたんだな。今までこんなとこまで来たことないから全然知らなかった」

大地達は今、機関にある講堂へとやって来ていた。

そもそも、ここにくる予定などはなかったのだが、突然レイシアが

「これからどうせ暇なのでしょう」

という一言から、魔術教育の話へと繋がり、最終的に機関で行われている魔術の教育について何も知らなかったレイシアが見学をしたいと言い出して、やって来たのであった。

貴族育ちの魔術師、レイシア・ブレイムにとっては興味を持つ話題だったに違いない。

この機関に所属してから結構な年月が経つというのに、魔術の教育機関が存在することが全く知らないとは流石だなと胸中で呟いておいた。

ともあれ、そのような態度を取る大地や友也にとっても、魔術教育については少々興味があつた。実は、二人とも機関内部に教育機関があることは知っていたのだが、一度も見たことがなかったというオチだ。

「なんとも奇妙ですわね。まるで学校と変わりませんの」

講堂に入るなり全体を見渡し、同じように魔術を習いたての頃の様子を思い出しているのだろう。あまりにも自分と違つのであろう教育の形態に、驚きを隠せていなかった。

「だろうねえ。僕は高校に通っているんだけど、ほぼ学校の授業と似たようなものだね」

現役高校生がこのような場所にいることが疑問になるのだが、友也は高校に通っているもののほとんど授業を欠席しているため、通っていないのとはほぼ同じだった。

「あそこにいる生徒達は、皆師匠がいないということなのかしら？」

「無論、だろうな。じゃないと魔術なんて聞きにこないだろう」

師匠がいない魔術師の理由といえば、代々魔術師としての家系が成り立っていたのにだんだんと衰退していき魔術を教える余裕がない。または一般家庭だったのに、ある日突然子供が魔術師としての素養を得た突然変種のどちらかだ。

主に、前者は墮、後者は奇とされている。

能力のない魔術師など、石をはさみで切り刻もうと努力することと同値。

つまり、無駄ということだ。

そのような者を弟子に取るような術師はいないのは当然のこと。

だからこそ、代わりに機関という組織の元で多人数相手に魔術を教えるというものが生まれたのだろう。

大方、生徒達に恩を売って、将来的に機関のために働くように画策しているのだが、世の中とはそういうものだ。

「そこまでして魔術に執着する……か」

しかしながら大地としては、魔術師であると言名乗ればそれだけで魔術師としての価値を生みだすのでは、と考えているのだが。

「しかし大丈夫ですか？」

「何がだい、レイシア」

首をかしげて授業を熱心に聞いている生徒を尻目に、レイシアは耳打ちすることなく毅然と腕組みをしていた。それに友也が尋ねる。

「魔術は隠匿が基本ですが、このように複数相手に公言してもよろしいのかしら？」

「ああ、そのところは大丈夫だ。授業の内容をためてみるよ。レイシアなら、あれがどの程度の難易度を表す魔術かわかるだろ」

横から口を挟んで、大地はなにやら変わった書体である魔術式がいくつか書かれている黒板に指を向けると、レイシアは眉根をひそめる。

そして、次の瞬間にはフンと鼻で笑った。

「そういうことですね。あれは、魔術師なら誰でも通るくらいに初歩の初歩といわれる魔術ばかりですわね」

その通りだ。

機関で教えている魔術は、教卓前で話している魔術師のオリジナルの魔術ではない。複数、それも数十人程度いる人間相手に、それも弟子ではないのだから自らが会得した自術を教えはしないだろう。ということとは、教えていることは基本となる魔術の工程でしかなか



った。

本当に、魔術師をはじめるといった人が習うような術式なのだから、おそらくここにいる人間は全員が魔術を習いたてに違いない。

ちなみに、大地達はその基本魔術を習いに来たのではなく、暇つぶしによる見学だ。

魔術の鍛錬を行ってもよかつたのだが、任務を終えた次の日くらいは体内に眠る魔力を調整する必要があると大地は思っているので、一日フリーだ。

同じく友也も動く気はなく、レイシアは単に休みたいだけといういかにも墮落した三人であった。

大地達は、段々になっている中規模の講堂の一番後ろで、教師に目立たないようにひっそりと佇んで授業の内容や、周りの空気などをぼんやりと眺めていく。

おおよそ、生徒達は大地らの存在に気づくことない。  
それだけ本気で魔術を会得しようと必死なのだ。

先ほど言ったように、墮の刻印を植えつけられた魔術師は親に一族復興の期待を背中に背負わせ、奇とレットルを貼られる魔術師は、一般人とは違う世界に浸りつつ、自分は特別だと思いついででの優越感をどこかに持つ。

人間とは誰しも自分が特別な存在と思いついてみたい習性がある。

それが魔術師であっても構図は変わらず、自分はどこか特別な魔術を体に眠らせていると思いついで、ひたすら修練に励んだりするものだ。

ひしひしと、生徒達の背中に感じる何かに声なく笑っていると、レイシアが思い出したかのように自分の手をポンと叩いた。

「そうでした。二人とも、最近物騒な事件が起こっているのを知っているかしら？」

「事件？」

大地と友也は、突然の切り出しにきょとんとして顔を見合わせる。

「ええ、ここ数週間で八人ほどの集団昏睡が起こっていますの。そして、今日また新たに昏睡者が現れたということを読みましたのよ」

今更ながら、友也が顔を隠すのに使っていた英字新聞はレイシアが読んでいたものだった。当然、彼女は西洋出身のために英字が読めるということなのか。それとも英才教育の類がバイリンガルを生んでいるだけなのかもしれない。

大地はバレない程度に友也を一瞥すると、レイシアが言い出した事件について頭をめぐらせる。

最近発生している集団昏睡……

「ああ、あの事件か」

しばらくして大地はレイシアが言っている事件のことを思い出した。確かここ数日でニュースで引っ張りだこになっている連続昏睡事件のことを指すのだろう。

「なんでも、被害者には外傷がなくて意識だけがなくなっている

状態だつて言つてたな」

「眠り子とも言われているそうですね。何でも被害者は全員成人に満たない子供ばかりがこん睡状態に陥っているようで……奇妙な事件ですわね」

言い終えるのと同時に、顎に手を当ててレイシアは思案顔になつて何かを考える仕草をとつていた。それは、まるでなにやら心当たりがあるようだと言わんばかりだ。

大地は黙つたまま友也の顔を覗き見ると、僕は何も知らないよという間の抜けた顔を作つていた。

それで大方、レイシアの考えていることが読めた。しかし、ここで本人に向かつて問いただすほど大地は興味があるという訳でもなかったのだ。

「まっ、事件のことは全て警察が何とかしてくれるだろう。僕らは自分自身が昏睡状態にならないように細心の注意を払えばいいだけだと思うよ」

「……そうだな」

「だけど、どうしてこんな話を僕たちにするんだい？」

「ええ、それは生徒達が眠り子に見えただけですの。私達よりも

四、五歳は小さな子達ばかりでしたので」

「なるほどね」

結局、最終的には大地の曖昧な返事によつて、この話は収束を向かえたのだつた。

それからなんとなく授業を見学してしばらく時間が経ち、そろそろ飽きてきた三人は大きな音を出さないように講堂を後にしよ

うとドアに手を掛けた瞬間だった。

どこからか、視線がこちらに向けられていることに気がつく。

魔術師ならば一度は体験したであろう独特かつ冷酷な視線とは違い、全身から悪寒の汗を垂れ流さんとするこのねっとりとはばりつくような視線とはなにか。

三人はチラチラと背中にくつつく視線の先をなぞってみると、そこにはとある一人の男が上を見上げて口を吊り上げていた。

別段、見上げるのは敬意を表しているわけではない。

ただ、段々状の講堂になっているから自然とそのような目線となっているだけだ。

「おお、ちょうどいいところに来たな」

そんな声を発して大げさに両手を広げ、歓迎する姿勢を見せつけ教壇前に立っていた男は、大地達とは直接的にはあまり面識のない人物であった。であったが、機関内部にいる魔術師のことならば大体のことは知識や噂として耳に入っているものだ。

「見て見なさい生徒の諸君。今私が目を向けているのは、君達の先輩にあたる魔術師だ」

さも説法をする神父のような物言いをするのは、単にそのしゃべり方が板についているだけだ。

あの教師ぶっている人物は、人に教えることが好きで好きでたまらないという偏屈の魔術師で噂されている人だった。

魔術師というよりは、研究者というべき存在の男と揶揄されている変わり者。

「これから実践する魔術は私が行ってもかまわない。だが、ここは若い衆にやってもらうのが最善だと思うのだ。なぜなら、若いから魔術のキレも良いし、それに君達にとってもあの子達にとってもいい刺激になるだろう」

このまま外に出て行きたい衝動に駆られる大地達だったが、なぜか足が地に着いたまま動かない。

まさか、一瞬の間にあの教師が魔術を発したのかと思われたのだが、実際は全くの見当違いで逃げられなかったのは、教師に次いで生徒達の無数の眼差しがこちらに向けられていたからだだった。

「というわけでどういうわけかは知らないが、せつかくこんなところにいるんだ。君達にはちょうど私が披露しようと思っていた基礎魔術の模擬を手伝ってもらおうよ」

「はあ？」

困惑するなといわれるほうが難しいくらいに、勝手に進められていく話に大地はげんなりとした。らんらんと目を輝かせて伺う教師は、もはやその気にすらなっている。

「もうこの場から逃れることは出来ないよっていう雰囲気だねえ」

友也はクスクスと笑いながら、事をさぞ楽しそうに見物していた。どうして呼び止められているのに第三者の目でそんな言葉を言えるのだろうか。

「さあ、教壇に立って魔術を披露してくれたまえ。安心しなさい。君達が汗水たらして会得した術ではなくて、魔術師の基礎たる魔術発生のデモだと思ってくれたらいい」

「どうして私達がやらなくてはいけないのかしら？」

何か反論すべきかと思っていると、レイシアが代弁するように前に立ちふさがっていた。

「私達は生憎任務が終えたばかりです。ですから小休止を兼ねて、機関にある教育の場を見学していただけのこと。ですから、魔術を披露するならあなたがやりなさいな」

腕を組みつつ、毅然たる態度と凜とした大きな声で言うレイシアはとても頼もしい。これほどの堂々とした態度で言われたら、相手も少しはひるむだろうと思っていた。

だというのに、相手は怯むどころか白い歯を見せて言葉を返してくる。

「そうかそうか。君は確かレイシア・ブレイム君だね。噂は聞いてるよ。機関内では随一の魔術師であり、元々もった優れた才能と卓越した英才教育のおかげで、私も負けるくらいの豊富な魔術に関する知識を持っていると聞く」

なんとも安っぽいお世辞なのだろう。

実際にいくらかは本当のことを交えているものの、大半はどこかで聞いたことがあるような定型句だ。

下らないな、と教師に苦笑しレイシアへと顔を向けると

「ま、まあそうですね。私のことを褒めて下さるのは光栄ですの」

……頬を赤くして、照れていた。

「そんな優秀な魔術師であるレイシア君には是非ともここで素晴らしい魔術発生の過程を見せて欲しいのだ。おそらく生徒全員がそれを望んでいることだろう」

魔術師が教育について語ることは稀にあるくらいだ。まさにその稀に属する人物が、教卓に立っている人物であり、そこまで人に教えるのが好きならばいっそのこと学校の教師にでもなればいいのに。

「そ、そうですね？ 皆さんは私の魔術を見たいとおっしゃるのかしら？」

レイシアの問いかけに振り返って見ている生徒全員が首を縦に振っていた。ここに魔術を習いに来ている生徒はほぼレイシアのことは知らないだろう。

それが、今しがた優秀な魔術師と聞いた暁には、どれほど優秀なのか見たいのが人間の性というものだ。

「し、仕方ありませんわね。なら、特別に私が魔術を披露してさしあげますの」

大船に乗ったつもりで、手を腰に当てて胸を張ったレイシアに向けられたのは拍手喝采だった。貴族というものは褒められるのが好きという性格を持つのが多い。無論、レイシアも例外ではなかった。

「大地さん、友也。二人は私を傍観ないし羨望の眼差しを向けて教卓の横にでも立っついていてくださいな」

要約すると、何もなくていいということ。

まったく、あのような魔術師に誑かされてほいほい教卓に立つレイシアを見ていると、よく名家の出だといえたものだなと思う。

友也も同様のことを思ったのか

「レイシアはおだてに弱いからねえ。仕方がないよ」

と、堪えきれずに今にも吹き出しそうになっていたのだった。



## 第一話 魔術師と魔術機関 (4)

あれからレイシア先生による特別講座は夜まで続いた。

前に立って大衆に教えることが気持ちいいことに気がついたのだろう。いちいち魔術を発動するたびに小さな歓声上がるのだから、ますます調子に乗って教えだす。

全てが尊敬の眼差しで見られるならば、余計に恍惚に浸ってさらにいろいろな魔術を扱いだし、再び喝采の拍手を浴びればなお鼻が高くなる。

かろうじて安心したのは、披露した術全てがレイシア独自の魔術ではないということ。

もし、調子に乗ってあそこで秘術を披露していたならば、名家の名に恥じる行為だからだ。

基本的に自分が苦勞して会得した術式をむやみやたらに使用するのは好ましくない。

それは、魔術師の掟でもある隠匿に反するし、自分が持つ切り札として忍ばせておくのが一番良い。最善の使用手段としては魔術師同士による戦闘が顕著だ。

そのような場では、常に相手がどのような魔術を扱うのかというせめぎあい、かつ心理の読み取り合戦となる状況が生まれてくる。

そんな場面に、相手の魔術がどのような構造をしており、どのように使ってくるのかがわかればどうなるだろうか。

答えるまでもなく相手の出方が見て取れるのだから、簡単に対策されて敗北の味を噛み締めさせることになるのは明白だ。

「ふう」

機関にやって来た朝の日差しはもうどこにも姿を見せてはおらず、空はすっかりと夜の闇へと変貌していた。辺りを見渡しても人の姿を捉えることはなく、あるとすれば人通りが全くない真っ直ぐの道と、横に聳え立つ都会の雰囲気を漂わせるビル。そして淡い夜空へと広がっている星と月くらいだろうか。

神々しく光る三日月に照らされ、静けさを保つ空間を大地は一人歩く。

都会ではあるのだが、この辺りは人通りが少ない場所だ。加えて昼間、機関の教育場でレイシアが言っていた連続昏睡事件、通称眠り子事件　と新聞ではそのように言い換えられていたらしかつた　が起こっているからこの時間帯に外に出る人物はいないのだから。

…当然といえば当然だ。

自分が襲われる可能性があるというのに、のこのこと外を闊歩する人間がどこにいるのだろうか。皆、自分はどこか特別だと心の奥底で願ってはいるものやほり、もし、という方が一の状況を考えると、より生き残る可能性を選ぶのが定石。

だからこそ、家で過ごして夜の街に出ないのがもっともな安全策なのだ。

しかし、大地はそんな危険とされている街を特段警戒することなく歩いていた。

それはこの事件に関わろうとしているわけでも、事件を解決しようという小説の主人公じみた行為を行うわけではない。

答えは単純で、自分の家へと帰る時間がちょうど今だからであった。

それもこれも煽てられたレイシアが、長時間にわたる魔術実践と理論を説明したせいだ。

はあ、と大地は溜息をつきながら帰路を辿っていく。

先ほどから体内の空気を夜の街に吐き出すばかりなのは、考えないでおこう。

五月に入って半ばとなるこの季節は、最近の温暖化により例年よりも暖かい気候となっている。だというのに、今日はやけに外の空気が冷たい気がした。

大地が着ている薄手の服や上着には何の魔術もかかってはおらず、単なる着るためものなので少し肌寒い。

火の系統を操る術者ならばこの手の寒さは簡単に打ち消せるのだろうが、生憎大地は火の系統を持ってはいないから、寒さを肌を感じながら帰宅していただくだけだ。

沈黙した空間を一人悠然と歩いていく様は、孤高の狼。

その狼が大地だと思つと、自分でも反吐が出るくらいの気取り屋だ。

なんともつまらないことを思いながら、外の景色をぼんやりと眺めて前へと進んでいく。  
と、刹那のことだった。

「！」

背後から何かの気配がした。

静寂の領域が一気に熱を帯びたように加速していき、まるで氷の中に熱湯を入れて急激に溶かしている感覚に似ているもの。そして、幾度となくめぐり合って来たこの気配は間違いなく……

大地は、黒の上着に忍ばせている物へと手を掛けた。

いつも通りのひんやりとした感触が備わっている一丁の拳銃、名を魔銃と呼ぶそれを大地はしっかりと掴む。幾多の戦いを乗り切ってきた相棒の感触は、十分に重い。

そして、一気に取り出し気配がする方向へと銃を向けた。

「誰だ」

短く、声を低くさせて大地は問いかける。向けているのは魔銃を持つ右手のみで、顔と体は前を向いたまま魔術師の顔を作っていく。

これで、振り向けばただの一般人だったとなると、事は一大事へと発展する恐れがある。なにせ、銃というこの国では見る機会がないものを突きつけているのだ。そんなところを誰かに見られたならば、たちまち逮捕という末路が待っている。

だが、ここは人が誰も通っていない虚無の空間だ。ならば、このような状況が生まれたとしても見られることはない。

それに大地には確信があった。今、銃口を突きつけている相手は間違いなく魔術師ということに。この独特の空気をわざとらしく放っている見えない相手は大地を一般人か何かと勘違いしたからなのか。それとも単に気配を消すことが出来ない下級の魔術しなのか。

問いかける先から、声が返ってこない。

互いに沈黙を維持しつつ、大地は銃口をぶらすことなく一点をめぐらして照準を構える。もはや戦いはすでに始まっているのだ。

すでに攻撃の準備は整えている。

たとえ、相手が何かをしでかそうとしても、それよりも速い速度で引き金を引ける自身がある。伊達に魔術師という旗を背負っているわけではないのだ。

大地はほんの少しだけ間を取った後、一気に後ろへと振り返る。すると、銃口の先に突きつけられていたものがあつた。

夜と街灯の光に反射されて、ギラと光るそれは銀。ある程度の長さを保って大地の銃口へと突きつけられていたものはまぎれもなく日本刀であつた。

次いで、日本刀を握る主の顔へと視線を移す。

一瞬、大地は眼前の光景を忘却しかけたくらいにあっけに取られた。驚くことに、剣を握っていたのは巫女服を身に纏った少女であ

ったのだから。

「……俺に何の用だ」

しかし、一切の感情を消した冷たい仮面を貼り付けて、大地は刀を突きつける少女へと対峙する。

対する少女も、魔術師であるが故の行動か、大地と同じ顔つきで威嚇を行う相手へと目を逸らすことなく睨み続ける。

小柄の体つきの割には、なかなかの威圧感を放っていると大地は感じていた。

大地の頭一つは小さいであろう背丈の少女は、大きな両目を見開き、鋭い眼光を刀と一緒に突きつけてくる。巫女服を身に纏った少女の体軀は華奢で、うっすらと見せる白い手で握られている刀が持ち主にとって重く感じるほどだ。

巫女服に刀、さらに薄い灯りに照らされてちらつかせる長い黒髪を合わせると、完全な和の少女がここに存在する。

これで静かな佇まいで大地に尋ねてきたのならば、大和撫子の称号を彼女に与えてもよかつたのだが、残念ながらそれは出来ない。

刀を突きつけていること自体がそれに反する上、赤い巫女服の袴の周りには同じ刀が四本巻きつけられていたからだ。つまり合わせで五本の刀の鐔を腰に巻き付けている。

そのような少女がしばらくの後、口をゆっくりと開けた。

「あなたは魔術師で合ってるわよね？」

「なら逆に聞こう。お前は魔術師なのか？」

仮に、大地が魔術師でないと言ったならばどのように捉えるのか。ただの狂気にはからんだ人間とでも思われるだろう。なにせ、銃を取り出した時点でアブノーマルな存在と化しているからだ。

同様に少女も刀を両手で握り大地と対峙している。この国での廃刀令は何百年も前に滅びていることくらいは知っているだろうから、自分を裏の世界で生きている人間だと誇示するようなもの。つまり、すでに大地のことを魔術師として見られていることは確実である。

「ええ、私は魔術師よ」

今度の返答は、数秒もかからなかった。半ば分かりきったこのやり取りは所謂魔術師同士の挨拶のようなもので、万が一、一般人であった場合という危険性を取り除いての質問だといえる。

「奇遇だな。俺も魔術師なんだ」

「あら、それはどうもこんばんは」

言って少女は薄く笑う。笑ってはいるものの、警戒を解かないでいるのは流石魔術師だ。

「で、そんな物騒なものを突きつけて俺に何の用だ？」

「それはお互い様よ。まあ、魔術師同士でもしあなたが敵であったのなら、もう斬り裂かれているけどね」

しれっと恐ろしいことをいうのもまた、魔術師たる所以だ。

「おいおい、俺はお前と過去にどこかで会ったか？ わけの分か

らない因縁ならごめんだね」

普段あまりとらないこのようなクールに気取った口調になったのは、夜の街と高揚する気分から。自分でも何かに酔っているのではと思いたいくらいに臭い。

「ううん。あなたとは会ってないわ……それよりもね、単刀直入に聞くわ。あなたはあいつ（・・・）の仲間なの？」

見ず知らずの少女にあいつの仲間といわれて、早急に思考を開始する。しかしながら、あいつと言われても思い当たる人物が浮かぶどころか、そもそも質問の意図が分からない。互いに持つ武器で相手を威嚇しながらの思考は、無駄に終わった。

「あいつ……って誰？」

ここで、ハツタリをかますという選択肢がある。

相手はもしかすると大地を狙う輩の可能性もあったのだが、どうも目の前にいる少女はそのような感じではない。何かを探すような心当たりはないのかという質問に聞こえたのだ。

「そう……ならいいの」

一瞬だけ訝しむ様子で大地を伺ったが、やがて少女はそう一言だけ発すると刀を鞘にしまった。

五本の剣が彼女の鞘に全て納まり、時折吹き寄せてくる風が彼女の髪をふわりと舞わせる。これがもし、出会いがしらに刀を突きつけられていなければ間違いなく目に留まっていた光景であった。

「ごめんね。疑って悪かったわ」



そして、先ほどの冷徹な表情を消して素の一般人としての笑顔で言われたら、思わずどうして銃などを突きつけていたのだろうかと自問してしまいたいくらいに、綺麗だったからだ。

だから、こちらも冷たい表情を作る仮面を自然と剥がしていた。まさか、これまでのものが全て演技だということはないだろう。そんなことをするならば最初から大地に襲い掛かっていたはずだ。それを刀を突きつけただけで留まったのは、襲う気はない証拠の一つでもあった。

大地は向けていた銃を降ろし、そのまま上着の中へと忍び込ませると警戒を解いた少女へと改めて向き直る。

「ああ、別に構わないよ。このまま戦闘に入ってたなら命の保障はなかったけど」

「ふーん、言ってくれるじゃない。あなた、そんなに強いのか？」

そういって、全身をまじまじと見つめてくる少女。さっきの凛とした態度から一気に好奇心を募らせたのか、じーつと全身を嘗め回すように見られるので、なんだかくすぐったい。

「どうだかな。自分が強いって奴ほど小物が多いものだ」

「能ある鷹は爪を隠すってことね」

大地は頷く。

強いと言いつ張るのは、真に強い場合と大海を知らない蛙くらいなのだ。自分の本当の力は自分のみしか知らない。その力が一体どのよう比較するのかを考えると頭に霧がかかりそうなので、思考をすぐに断ち切った。

「ところで、お前は一体何者なんだ？」

そんなことよりも、大地は気になっていたことを質問する。

魔術師だといった彼女は、この町、青葉には見かけない顔だ。機関にいる人間ならばある程度把握しているつもりだが、頭の中にある手帳をいくらめくったところで彼女へと到達することはなかった。

「私？」

聞かれることを予測してなかったのか、彼女は素つ頓狂な声を上げて首をかしげた。この時大地はどういった経緯で大地に刃を向けたのかを知りたかったために何者と聞いた。しかし、少女にとっては何者とはどのような職種という意味に聞こえたらしい。顔にそのような意味合いを残し、次いでこう言った。

「私はただの魔術師よ」

まるで、信じるならば好きにしろと言われそうな笑みをして指を立てる少女。

ただの魔術師と一般人に言えば何と思われるか。そんなもの答えは一つだけ。馬鹿にされることだ。

「それじゃあね。あなたは違うのならまた探しに行かないと」

大地に向いて立っていた少女は語尾だけ小さな声で呟くと踵を返す。それから首を回して顔だけ大地へと向けると

「もし、またいつかどこかで会う機会があつたらその時はよろしくね」

と、そのまま背中を向けてその場を立ち去っていったのだった。  
彼女が夜の闇へと消えるまでそう長くはかからなく、ほんの数  
秒で完全に姿を消していく。

そうして、再び静けさを取り戻した空間へと大地は一人立たされ  
ていた。

「……………不思議な奴だったな」

ほんの数分の出来事だというのに、大地は勝手に事を運んで理解  
し得ないまま去っていった彼女に対して顔を綻ばせた。

…………… 本当に、ここは静かな空間だったんだなと改めて肌で感じる。  
刀を向けられていたとは到底考えられないくらいに、物音一つし  
ないここから唯一聞こえてくるとすれば、どこからか吹きぬけてく  
る風だけだ。

大地はただ、その風にゆうつらりと当たって一人耽っていくのだっ  
た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9614y/>

---

異能力の夢幻者（仮）

2011年12月11日17時50分発行